2024年6月16日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

マイ・バースデー

［コリントの信徒への手紙二5章17～21節］

「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。

 小林 茂さんの奨励を感謝します。やはり、教会に連なっていらっしゃる方がどのように信仰に導かれてきたのか、またはその歩みをされてこられたのかをお聞き出来ることは、教会にとって幸いなことだなぁと思わされます。

　今日は、「聖書教育」誌の聖書日課は、コリントの信徒への手紙二の5章の後半からなのですけれども、お証しと丁度重なるような言葉がその中にありました。―「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」。以前の訳では、「だれでもキリストにあるならば、その人は**新しく**造られた者で**ある**。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」となっていました。キリスト者という者は、言ってみれば、「新創造物」なのです。「古いものは過ぎ、すべては新しくなった」と。所で、私たちは誰でも「オギャー」と叫んで生まれてきます。いや、もっと正確には、与えられた命を生き始めます。それが「バースデー」ですね。しかし、キリスト者にはもう一つのバースデーがありますよね。先日も一人の方がバプテスマを受けられましたけれども、その日です。バプテスマは単なる形式ではなく、それは「新生（新しく生まれされられる）」という出来事です。‟〇月〇日、それが私の新しいバースデーです”と覚えておきたいものです。自分の誕生日を忘れる人は殆どいないと思いますが、自分のバプテスマの日は、うっかりすると忘れてしまったり、今年も、アレッと通り過ぎてしまうこともあるかも知れませんね。でも、調べれば分かる方は是非その日を大切にして頂きたいと思います。ちなみに、今日6/16がその丁度記念日の方もいらっしゃいますね。おめでとうございます！

神様は、この世界が造られる前からおられ、ご自身の言葉と御手でこの宇宙、また動物、植物、元素などを造られました。聖書は、生命は偶然の産物ではなく、神様の愛のみ心の中に造られたと告げています。今も、例えば一人の命の誕生を、その親になる人はドキドキしながら待ちます。親はなぜその子の誕生を喜ぶのでしょうか？一番大きな理由は、その子との出会いを喜ぶのだと思います。初めての出会いです。そしてその子と出会い続けていくスタートがそこにある。私は、バプテスマというのもそうなのではないかと思いました。「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです」。―「新しく創造された者」。これは凄い言葉だと思います。人間以外の生物には言われていない言葉です。そしてそれは「キリストと結ばれる人はだれでも」なのです。それは、‟キリストによって、神様と和解させて頂いた者は”ということですね。正に先ほどお証し下さった「放蕩息子の譬え話」に表されていることです。あのさまよっていた息子は、父親に「死んでいた者」と言われています。「死んでいたのに、生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか」と（ルカ15:32）。そうなのです。私たちは皆いつしか孤独な迷子になり、帰るにも帰れなかったのですが、私たちを見つけるや否や、父の方から駆け寄って、私たちを抱きとめて下さったのです。お前と、また会えて嬉しい。お前はもともと私の子なのだから、と。

この世の中は、どこか「犠牲」ということを良しとしてしまう残酷な社会だと思います。例えば、今もひどい戦争が起こっています。その時に作戦を練る者は計算をします。どう攻めれば犠牲を少なく出来るだろうか。「ある程度の犠牲が出るのはやむを得ない」ということは織り込み済みで兵士を戦地に送り込みますよね。この論理を、私たち、日常生活の中で抱いてしまうことはないでしょうか？それは、よ～く考えると自己保身の姿です。平たく言えば、‟自分さえ良ければよい”という考えです。これは誰の心にでもあるのではないでしょうか。私にもあります。しかし忘れてならないことは、その私たちの心が、主を十字架につけたのです。しかし、なお忘れてはならないことは、その主は私たちを分け隔てしません。選別しません。「多少の犠牲はやむを得ない」などと考えない。そうでなければ、あの父親は、老人になるまで、あの死んでいた息子を待ち続けることなどなかったでしょう。そして、その父親（主ご自身）の方から、私たちを抱きとめる「和解の手」が差し伸べられているのです。そして私たちに、こともあろうに、神様のわざ（神様との和解、また、人々の中の和解）の一端を担うように送り出すのです！神様の大きな愛を知ったあなたは、その存在が神様の和解を告げる者とされている、というのですね。驚くべきことです。

「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。」

「えっ、そんな大それたことはちょっと…」と言いたくなります。しかしそうじゃないのですね。私たちの立派さとか正しさとかではなく（それはむしろトラブルのもと）、神様が私たちの中に働いて下さっているです。私たちが年齢を重ねているとか、病気を持っているとかそんなこととも関係ありません。「これらはすべて神から出ることである」（コリント二5:18）と御言葉にありました。主が捉えて下さる御手は、大きく、力強いのですね。

最後に、申命記の一つの言葉を読んでお祈り致します。―「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。主はあなたを選び、ご自分の宝の民とされた」。（申命記7:6）

お祈り致します。

神様、あなたの御名を賛美致します。小林茂さんのお証から、あなたの愛の大きさ、確かさを新しくご一緒に聴くことが出来ました。感謝致します。「だれでも」キリストと結ばれる人は新しく生まれた者とされる、というあなたのはかり知れない愛を受けた私たちは、今度なあなたの愛を、少しでもこの世界に映し出してゆく存在とされていることは畏れ多いことではあります。しかし、この世界は本当にあなたの愛を必要としています。どうぞ、私たちを、あなたがあなたの方法でお用い下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。